

# 海外レポート

## ジョクジャカルタのアーツマネジメント

岡部 政美

私は、2012年5月18日から2013年5月17日まで、インドネシアのジョクジャカルタにおいて、アーツマネジメントの調査を行った。このうち2013年2月28日まで、都市研究プラザの事業「アジア・アーツマネジメント研究機構確立のための若手研究者派遣・育成プログラム」から派遣され、以後は私費滞在している。以下に今回の調査研究の概要と、調査内容について報告する。

### 1. アジア・アーツマネジメント調査

本派遣事業の目的は、アジア型のアーツマネジメントの研究と形成支援のための基礎調査にある。アーツマネジメントとは、欧米で生まれた、「社会においてアートを活かしていくノウハウであり、社会とアートをつなげる手段（林 2004:2）」である。都市研究プラザがアジアに着眼した背景には、欧米型のアーツマネジメントの理論をそのままアジアに応用するのが困難であることと、近年、アジアの目覚ましい中間層の台頭や、多発する災害などによって、アジア情勢が大きく変貌しつつあるなかで、アートの存在自体が大きく揺らいでいることにある。本調査は、まず大阪市立大学と長年、協力関係にあるタイとインドネシアの大学に絞って行われた。海外の活動拠点は、タイのチュラロンコン大学、インドネシアのガジャマダ大学と、インドネシア芸術大学ジョクジャカルタ校に置かれている。

数名がそれぞれ調査分野を絞って派遣され、私はインドネシアの地方都市ジョクジャカルタの舞踊を担当した。この地域には王宮と芸術高校・大学があり、舞踊活動も盛んである。私の専門は、ジョクジャカルタの王宮舞踊であるが、今回は創作舞踊や他民族の舞踊も含め、総合的に舞踊活動全般の調査を行った。

### 2. インドネシア芸術大学ジョクジャカルタ校

私のスポンサーはジョクジャカルタの芸術大学だった。この芸術大学は、1963年に設立された舞踊アカデミー

が、1984年に美術大学、および西洋音楽アカデミーと統合されてできた国立大学である。1994年には映像学部が新設され、現在、上演芸術学部と美術学部の3学部から成る。総合的な芸術大学として3学部を設けたのは、異なる芸術の交流を促し、学生らの感性を豊かにすることと、新たなインドネシア文化の創出につなげるためだった。

この芸術大学は、インドネシアに6つある芸術大学のなかでも、ユニークな存在である。例えば舞踊科については、他校が、その地域の民族舞踊を重点的に教えるのに対し、ジョクジャカルタでは多地域の舞踊を積極的に教えている。2009年から2014年度のカリキュラムでは、ジョクジャカルタ舞踊が13単位、その他の6地域の舞踊は27単位が必修となっている。バリの友人によれば、バリの芸術大学では、9割をバリ舞踊に絞って教えているという。また、西洋音楽学科はインドネシアで唯一の存在である。西洋指向の強い日本の芸術大学や音楽大学とは異なる。

この芸術大学の性格はちょうど、ジョクジャカルタの町の縮図ともいえる。かつてスルタン9世はジョクジャカルタをミニ・インドネシアと言った。ジョクジャカルタは、比較的安全で住みやすいことから、大学も多く、他地域・他民族の出身者が多いためである。日本の県人会のような、州や民族ごとの集まりもある。

そのため芸術大学には他州出身の学生が多い。教員も、エネルギーでオープンな性格の人が多く、学外での活動も活発に行っている。私はどの教員からも、大変な親しみをもって接してもらい、調査の名のもとに、よくお宅にお邪魔した。

### 3. ジョクジャカルタにおける舞踊の状況

インドネシアでは、強力な文化政策のもとで、各州の代表的な文化が創られてきた。その特徴のひとつは、既存の文化だけでなく、地域らしさをもとに新たに創造された文化も歓迎され続けていることにある。ジョクジャカルタの王宮舞踊は、州の代表的な文化とされ、それをもとに、様々な舞踊が創られ続けている。

その代表的なものに、スンドラタリと呼ばれる芸術舞踊劇がある。毎年、地方政府主催のスンドラタリ・フェスティバルも開かれている。フェスティバルの目的は、王宮舞踊をもとに、ジョクジャカルタらしさを模索しながら、新たな舞踊劇を創ることにある。毎年、活力に満ちた作品が生み出され、ジョクジャカルタの踊り手たちの、最大のイベントとなっている。

芸術大学では、より先鋭的な活動が盛んである。舞踊

科で創作舞踊を専攻する学生のほとんどは卒業制作に、いくつかの地方の舞踊を組み合わせた斬新な作品を生み出している。教員も王宮舞踊に近いものから、モダンなものなど、意欲的に創作し、様々な機会で上演している。

また近年、インドネシアでは国家の公認宗教ごとの祝祭日を国家行事として執り行っており、たいてい舞踊が用いられる。私は2010年にジョクジャカルタ特別州主催のクリスマス行事を見た。そこではキリスト教の教えを、うまく王宮舞踊に織り込んだスンドラタリを上演していた。

テレビの歌番組でも踊り手は活躍する。ポピュラー音楽の歌手のバックで踊るのである。王宮舞踊の踊り手らは、何でも器用に踊りこなすことが出来るため、ジャカルタのテレビ局は、わざわざジョクジャカルタから踊り手を呼び寄せるのだという。私は2009年にボロブドゥール寺院で行われた、国家主催の仏教の花祭りを見た。アセアン各国から僧侶と舞踊団を招き、アジア圏の平和を訴える大規模なものだったが、各国の舞踊団の半分以上に、ジョクジャカルタの踊り手が加わっていた。これも彼らが、簡単なものなら、すぐに他地域の舞踊を踊ってしまうからだった。

もちろん一方で王宮舞踊も、王宮や芸術高校・大学、民間の舞踊団体で受け継がれている。今でも大きな王宮儀礼では、舞踊が用いられる。このようにジョクジャカルタでは、王宮舞踊を学んだ踊り手が、様々な舞踊活動を行っている。王宮舞踊しか踊らない踊り手もいるが、たいていは様々な舞踊を経験することを好む。

#### 4. 新しくて古い舞踊教室の誕生

王宮舞踊は、ジャワ人貴族の必須の教養であった。舞踊を通して王宮内で取るべきマナーを身に付け、スルタンを頂点とする、強固な身分制度を維持するためである。独立後も、王宮や民間舞踊団体で、子供に舞踊を学ばせる親たちは、舞踊を通じたマナー教育を期待した。

ところが踊り手たちが、様々な舞踊を忙しくこなすようになり、王宮舞踊のマナー教育の側面は薄れてきた。新たな舞踊では、エネルギー的なものが好まれるため、ジャワ人独特のゆったりとした舞台への上がり方、歩み方、礼拝などは用いられない傾向にある。若者だけで作

品を創り上げることも多く、年配者に対する敬意の表し方も揺らいできている。また実入りの良い舞台に立つことを選んだり、自分が教える立場であっても遅れて来たり、無断で欠席するなど、責任感に欠ける踊り手も見受けられる。

こういった状況を憂いて、2001年に、新たな舞踊教室が立ち上がった。目的は舞踊を通して、ジャワ人としてのマナーを伝えていくことにある。そのため教師らは、まず自らの規律を正した。教室の始まる15分前には必ず、教室で生徒を待つ。ひとつのクラスを2~3人の教師でもつが、よほどのことがない限り休まない。当然のことのように思えるが、仕事と家庭を持つ人にとっては容易ではない。逆に言えば、こういった当然のことが出来ない団体や教室が多い。

教室では、こうやって教師が生徒に規律と愛情を示すことで、生徒は自然に教師を敬うようになる。そこで教師は、舞踊の技術指導を通して座り方や、歩き方、他人との関係などのマナーを教える。教室の前後の、生徒を迎え、送り出す時間に、教師は座って待つ。生徒がきちんと教師に挨拶をする時間をとるためである。その際、教師はわざと低い位置に座り、生徒が教師より、さらに低い位置から、挨拶するよう導く。

しかし教師は厳しい稽古も、躰もしない。あくまでも自分が手本を見せ、生徒が舞踊を楽しむなかで自然にマナーを教える。そのためこの教室は人気があり、他の教室に比べ、生徒が舞踊を辞めることが少ない。評判を聞きつけ、他の教室から移ってくる生徒もいる。コンテストで優勝したり、政府の行事で踊るなど、優れた生徒も育てている。

#### 5. ジョクジャカルタの舞踊の今後

実は上記の教室の経営者は、芸術大学の教員である。様々な舞踊活動を通して、今の教室の必要性を感じたという。今後も、ジョクジャカルタの王宮舞踊は様々な発展の可能性を秘めている。その中で、王宮舞踊が輝きを失わずに発展するためには、この教室のような、王宮舞踊の意義に立ち返った、献身的な活動が必要である。

#### 引用文献

林容子. 2004. 『進化するアートマネージメント』. レイライン